

第 56 回 ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展(2015)  
日本館キュレーター指名コンペティション講評

国際展事業委員会

水沢 勉（神奈川県立近代美術館館長）

五十嵐 太郎（東北大学大学院工学研究科教授）

笠原 美智子（東京都写真美術館事業企画課長）

島 敦彦（国立国際美術館副館長）

港 千尋（多摩美術大学教授）

南 薫 宏（女子美術大学芸術学部教授）

## 水沢 勉（神奈川県立近代美術館 館長）

コンペ参加の指名を受けた5名のキュレーター（飯田志保子、住友文彦、高橋瑞木、中野仁詞、保坂健二郎）からは、それぞれ魅力的でスマートな提案が寄せられた。前回の蔵屋美香（キュレーター）と田中功起（アーティスト）という組み合わせは、アーティストのアイデアそのものが色濃くキュレーター的であり、結果的に、両者の共同作業を裏切るものにし、目覚しい成果を挙げ、賞を受け、注目を浴びることになった。

今回のキュレーションに重きを置くか、アーティストを重視するか、あるいは、そのバランスの点で評価するかで6人の委員が意見を交換した。アーティストを単独で選んだものは3案（飯田、高橋、中野）、複数選んだものは2案（住友、保坂）であった。結果的に、複数であることの意図と効果について、それぞれに疑問が残り、最終的には残念ながら選ばれなかった。また、単独のアーティストによるアイデアのひとつ（高橋による高嶺格）は、ジャルディーニ会場で隣り合わせの日韓のパヴィリオンとの連携を、内容的にも、形式的にも目論む大胆なものであったが、実現性の点で現状では十分に練りあげられたものには至っていなかったことが惜まれる。

単独のアーティストによる他の2つの提案（飯田による小泉明郎、中野による塩田千春）は、いずれもアーティストをよく理解した、長年にわたる信頼関係に結ばれたキュレーターによるものであり、甲乙つけがたいものであったと思う。ともに「家族」や「こども」が重要なキーワードとなる展示の提案であり、ヴェネツィアの日本館の空間にのみ特化しなくても十分にその真価を問うことのできる普遍性を備えたものであった。実現性の点で信頼性の高い安定感のある提案であり、その点でそれぞれに遜色はなかったものの、裏返せば、予想不可能性という点でともにそれほどスリリングではないという懸念もあった。

展示の形式では、「映像」（小泉明郎）と「インスタレーション＋映像」（塩田千春）の比較ということになるが、塩田が、ピロティー部分にもギャラリーとのつながりのあるアイデアを提案している点に、一日の長を感じさせ、また、「鍵」という新しいモチーフで作品に新たな展開を導き入れ、彼女らしい力強いインスタレーションが、空間全体の展示を得意とするキュレーター（中野仁詞）との共同によって効果を発揮することが期待できるものであった。委員会として最終的に投票により判断を下した。結果的にアーティスト単独案としては、中野＋塩田に票がすべて（4票）集まることになった。なお、折元立身を中心に老人問題を取りあげる保坂案には意外性とインパクトがあり、推す声が最後まで2票というかたちで残った。

## 五十嵐 太郎（建築史・建築批評家/東北大学大学院工学研究科教授）

これまで関わったコンペにおいて、今回はいつになくどれも個性的かつ魅力的な提案だったため、プレゼンテーションを聴くのは楽しいが、いざ選ぶとなると、個人的にもっとも苦勞することになった。したがって、ここでは当日の順番通りにコメントを書く。

一番手となった飯田志保子は、現在の日本の揺れ動く社会的な背景、日本館の作家の流れを踏まえた上で、家族をテーマとする小泉明郎の展示プランを提示した。ロジカルに説得力の高い内容であり、実際のリサーチ作業の結果に影響される部分があるとはいえ、旧作と新作の組み合わせから、会場の完成形もある程度、想像可能なレベルになっていた。

続く住友文彦の提案は、同じ作家の小泉明郎がかぶっていたが、異なる分野の高山明と組み合わせる切り口のユニークさと、時間や空間を操作し、人間の知覚を超えた世界の認識により、まったく異なる内容だった。またバイオロギングの技術がもたらす圧倒的な視覚体験も興味深い。ただ、日本館の周辺をどのように、どこまで使うかは未知数だった。

高橋瑞木の案は、このタイミングで韓国館と共同して展示を企画するというもっともチャレンジングなものだった。実際、ジャルディーニにおいて日本館は韓国館やロシア館と隣接し、地政学的な状況を反映している。高嶺格も最適な作家の選択だろう。一方、韓国館の状況がまだ不明で、リスクも高い。片思いでもよければ、やってもいいかもしれない。

中野仁詞による塩田千春のプランは、一番現実的で、すぐにでもできそうなものだった。彼女の作風も大きく変わらず、安定している。実は前々回のコンペで、塩田案は選考の最後で敗れていたが、今回は作品の背景に個人的な経験が加味されたこと、また日本館のスケール感や見せ方も具体的に想像されていたことによって、さらに強い案になっていた。

保坂健二郎の案は、もっとも企画の力を感じさせるものだった。国際展の動向を意識した問題設定、折元立身を軸にした高齢者アートという一見意外だが、なるほど今後重要になるテーマ、個展とグループ展、国際性と地域性など、様々な矛盾する要素を統合した内容。そして日本館の内部に壁を斜めに並べる空間的な解決。世界の反応を見たいと思った。

## 笠原 美智子（東京都写真美術館事業企画課長）

今回第 56 回のコンペは、日本を代表する実力と実績が備わった、今最も旬なキュレーターが、同時代を併走している、今最も旬のアーティストを選出するという、非常にオーソドックスなラインナップとなった。働き盛りの 40 代前後のキュレーターがミッド・キャリアの作家を日本館で取り上げ、世界を舞台に一層の飛躍を図る、ある意味、理想的な形だと思う。

飯田志保子の小泉明郎、住友文彦の高山明＋小泉明郎、高橋瑞木の高嶺格、中野仁詞の塩田千春、保坂健二郎の折元立身＋砂連尾理＋野村誠、いずれの企画案およびプレゼンテーションも見事で、正直、誰が選ばれても遜色がないと思われた。

ただ、やはり日本館の空間を考えると、個展の方が効果的にアーティストをアピールできるだろうと思われた。保坂健二郎案の「高齢者の、高齢者とともにある、高齢者のためのアート」というコンセプトは、日本の現在および近未来を考えると、不可避で重要なテーマであり、どちらかということ日本の美術館でこそ実現が待たれる展覧会だと思う。飯田志保子および住友文彦両氏が挙げた小泉明郎は、インタビューや演技指導、パフォーマンスを駆使する日本にはあまりいないタイプの映像作家であり、今後も有力候補となるだろう。ナム・ジュン・パイクを参照点に隣接する韓国館と協働を図るという高橋瑞木・高嶺格案には、現在の二国間情勢を念頭に非常に興味をひかれたが、カウンター・パートナーの問題もあって今回は見送りになった。しかし、引き続きこうした試行はなされるべきだと思う。

最終的には投票によって、4 対 2 で中野仁詞の「塩田千春／掌の鍵」案が選出された。

塩田千春は前々回の第 54 回コンペでも、東芋、田中功起と共に最終候補まで残った実力派である。どのような場でも独特な世界観によって培われた「塩田千春の空間」に変えてしまうインスタレーションの力は他の追随を許さない。「生と死」をテーマに、無数の赤い糸と古鍵、船と映像作品で構成する大胆なインスタレーションは、鍵と鍵がふれあう僅かな音が聞こえてくるようで、今回最も完成度の高い洗練された企画案だった。東日本大震災や福島原発事故が人々の意識から薄れつつあるなかで、是非とも実現すべき企画だと思った。

## 島 敦彦（国立国際美術館 副館長）

キュレーター候補者5名からの提案はいずれも、東日本大震災や原発事故を経験した後の現代日本の社会において今、人間は何にどう向き合うべきなのか、真摯な問いかけを含むものであった。またその内容には、家族の在り方、人間と自然との関係、国家の枠組み、生と死、記憶と時間、高齢化社会の現実と身体の共存など、広い意味で人間の生存とその課題が浮き彫りになるものばかりであった。

飯田志保子の「小泉明郎 / 家族の肖像」は、エキセントリックな映像で人間の感情を揺さぶる小泉の新旧の映像3作品を見せる正統的な個展形式だったが、図らずも住友文彦の2人展「高山明+小泉明郎 / 闘と境界」においても、小泉の映像が採用された。住友案では、地図を片手に日本館の周囲をめぐる高山の作品との対比によって、今日の管理社会からの解放と新たな出会いの場を作ることを目指した。

高橋瑞木は、ヴェネチアの日本館に隣接する韓国館との連携を念頭に置いた「高嶺格」による、国家の垣根を越えた斬新な提案を行った。しかし当初連絡を取っていた韓国のコミッショナー候補が選出されず、プランそれ自体が不安定になったことが惜しまれた。

保坂健二郎の「折元立身、砂連尾理、野村誠」は、認知症の母の介護を続ける中で制作された折元の写真や映像を主体に、同様に高齢者や障害者との共同制作を行っている砂連尾と野村の作品を組み合わせ、日本社会の問題にとどまらない普遍的な主題を提示した。

中野仁詞の「塩田千春 / 掌の鍵」は、天井から吊り下げられたおびただしい赤い糸に古い鍵が結びつけられる壮大なインスタレーションである。会場には2艘の小舟も搬入されるが、舟はそれらの鍵を受け止める、いわば手の形のメタファーであるという。実際に使われる鍵も実見し、それらが触れ合う音がまるで風鈴のようだが、ここには心地よさと同時に鎮魂の意味も込められている。映像や写真が主体になる前記4案とは対照的に、視覚的にも聴覚的にも物理的にも観客に最も直截的に訴えかける力を感じる作品である。ヴェネチアにどんな音が響き渡るのか、期待が高まる。

## 港 千尋（写真家／多摩美術大学教授）

今回のコンペティションでは、人間のありようについて深く考えさせられる点が共通していて興味深かった。それは「人間の条件」と言い換えてもいいが、その核心に創造性と記憶の問題があるからではないかと思われる。

1と2は全く異なるアプローチであるが、アーティストとして小泉明郎が共通して取り上げられており、1では家族、2では個人や集団、社会の「境界」が中心にある。3では日本と韓国の会場での位置関係に、政治的文化的な関係を投影する試みで、未知の要素が大きい分、挑戦的な内容である。5は「高齢者による高齢者の芸術として、高齢化社会における表現を正面から取り上げた」3人展である。4つの提案はどれも実現されれば、強いインパクトを与えるに十分なアイデアを孕んでおり、各キュレーターの政治的・社会的意識の高さ、そのためのリサーチの幅広さをうかがわせる。特に「他者」とのコミュニケーションの問題が意識されている点も特筆されよう。

最終的に選ばれた4もまた、「人間の条件」を感じさせずにはおかない。すでに国際的に高く評価されている作家だが、今回の提案は人間が自らの記憶を辿るときの、感覚や感情を丁寧に掬い取り、これをひとつの旅として提示するという、深淵なテーマを展開しており、大いに期待される。中心的なイメージとなる「鍵」は生と死のあいだに、個人と社会のあいだに、過去と現在とのあいだに宙づりにされつつ、訪れる多くの人々にそれぞれの鍵穴を探すきっかけになるだろう。設営には多大の時間とエネルギーがかかることが予想されるが、作家が欧州在住という点では、有利であると思われる。

プレゼンテーションについてひとこと添えておけば、どの提案もCGモデルや特別に制作した模型を使って非常に分かりやすかった。特に4は実際に作家が模型を制作する過程を短い映像で紹介し、より明快な具体性をもっていた。

註：

本文中の1～5は以下の案を示す。

1. 飯田志保子(小泉明郎)
2. 住友文彦(高山 明、小泉明郎)
3. 高橋瑞木(高嶺 格)
4. 中野仁詞(塩田千春)
5. 保坂健二郎(折元立身、砂連尾 理、野村 誠)

＝事務局追記

## 南 崑 宏（女子美術大学芸術学部教授）

今回のキュレーター候補者はほぼ同世代で、その多くは国内外での優れたキュレーションも多く、それぞれがどのようなプランを提案してくるか、大変楽しみであり、期待するものでもあった。

事実、それらは現代の表現が対峙すべき現実を真摯に見据え、どのプランも十分にベネチアの場におけるプレゼンスを示す可能性を持つものであったというのが、率直な印象であった。

図らずも、飯田志保子、住友文彦の、ともに小泉明郎をその作家あるいは作家の一人として提案したプランは、家族に象徴される極めて近い他者をパフォーマンスに拡大し、やがていかなるコンテクストにおいても解釈され得る普遍的な同化へと私たちの意識を誘う、のっぴきならない緊張感を浮上させるものであったし、保坂健二郎の折元立身を核とした「高齢者アート」も、何かを失った、あるいは過剰に与えられた、いわゆる健常的な世界から逸脱する主体が生み出すハプティックな知覚の顕現を通して、世界の新たな読み取りを促すものとして興味をそそられた。

高橋瑞木の高嶺格案は、不確定要素の多い韓国パヴィリオンとの、ナムジュン・パイクへのオマージュを意図するコラボレーションのプランでなければ、もっと明確な可視を可能とするプランとなっただけに、高嶺の才能を知る者にとって、どこか窮屈な不自由を印象づけることになったことは残念であった。

最終的に中野仁詞の塩田千春案が採択されたのは、戦略が皆無で、5万本の赤い糸とその先の同じく5万個の鍵という、既視感を凌駕する、記憶のマチエールの愚直なまでの圧倒感が、他のプランの開示される地平とはまったく別の地平にあったという印象の強度による。しかし、それはマッスとしてのモニュメント性ではなく、併せて展示される、世界各地の幼児に生まれたときの記憶を尋ねるといふ、極めてシンプルなインタビュー映像が象徴する、このインスタレーション全体の本質を表わす、現実を見据えるセンシブルにしてフラジヤイルな感性によって構築されるモニュメントといふべきものである。

展示においては相当の時間と困難が伴うかもしれないが、何よりも代替えの効かない、ベネチアビエンナーレの記憶に残る作品となることを期待する。